つながろう
CO·OPアクション情報
「築く・伝える、未来へ」
2012年4月25日
第16号

子どもたちが、放射性物質の測定を体験

© 山田省蔵

放射性物質の測定過程を見学する子どもたち。写真は、食べ物をミキサーにかけている様子。

4月3日。コープふくしま組合員の親子が日本生協連商品検査センター（埼玉県蕨市）にやって来ました。食品に含まれる放射性物質の測定を見学・体験するためです。子どもたちは、さまざまな検査機械に触れたり、実際の検査を行なう職員の手元をじっと見たりと、興味津々の様子でした。今回、日本生協連商品検査センターを訪問した親子は、昨年の11月から日本生協連が行なった「家庭の食事からの放射性物質摂取量調査」に協力していただいた方々で、自分たちの提供した食事がどのように検査されたかを確認しました。

●放射性物質摂取量を237家庭で測定

日本生協連の「家庭の食事からの放射性物質摂取量調査」は、2011年11月から2012年4月にかけて行なわれました。各家庭の2日分の食事（6食分と間食）を1サンプルとしてすべて混合し、その中に含まれている放射性物質を測定したもので、全国の237家庭（18都県、その内福島県内が96家庭）に協力いただきました。

結果は、検出限界（1Bq/kg）以上の放射性セシウムが検出されたのは、237家庭中5%でした。仮に、検出された食事を1年間毎日食べた場合、食事からの内部被ばく線量は、0.019 mSv ～ 0.136 mSv と推定されます。これは、国が設定した4月1日以降の「年間許容線量1mSv」の1.9%～13.6%でした。

日本生協連では、2012年度も全国の生協・組合員と情報や課題を共有していきます。

© 山田省蔵

ほうれん草の放射性物質測定準備の様子。

いわて生協　バスボランティア再開！

畑をつくるための土を運ぶボランティアたち。

いわて生協のバスボランティアが、3月17日に再開されました。

この日は、12月11日のバスボランティアを最後に　作業が中断していた陸前高田市広田町の「ふれあいひろば」づくりや、竹駒地区の未来商店街づくりを手伝いました。バスボランティアは昨年6月の開始から数えて51回目となり、今回は33人が参加、のべ1,837人が参加しています。

金子敏明さん

●再開を、皆さんが待っていてくださいました

1月と2月は中断していたバスボランティア。それに対して、再開の要望が相次いでいたといいます。いわて生協 の人材・組織開発部部長で、バスボランティア担当の金子敏明さんは、

「本当は継続したかったのですが、冬場になり寒い中での作業はリスクが高くなるため、残念ですが休まざるをえませんでした。しかし、最後となった12月のボランティアの際に、皆さんから『来年もやりましょう』と声を掛けていただきました。また2月の「組合員の集い」でも再開の話が出て、待っている方がたくさんいることが分かったのです。また、冬になって全国から来るボランティアが減り、被災されたから『もういらっしゃらないのですか』という声をいただいていたことも、再開のきっかけの一つになりました」

今後の取り組みについて金子さんは、

「いわて生協では、特にコミュニティーづくりのボランティアに取り組んでいます。家に閉じこもりがちな男性が表に出てこられるよう、土地を借りて野球場などを造ることができたらと思っています。また、陸前高田市では津波が来たラインに沿って桜の木を植える動きが始まっており、このボランティアへの参加も検討しています」と話していました。

ボランティア参加者からの声

下館希羅さん

今回で2回目の参加です。昨年の8月ごろからボランティアの募集を探し始め、そこでいわて生協のバスボランティアを見つけました。震災後初めてボランティアに参加したときは、住民をほとんど見かけず、驚きました。震災から1年がたち、ボランティア同士のつながりもできてきたように思います。これからも、このつながりを大切にしながら、力を合わせて復興支援活動をしていきたいです。

川島道雄さん

今回で23回目のバスボランティアです。ボランティアに参加した動機は、新聞の声欄に、「人が足りない」と書いてあるのを読んだことです。定年退職し、時間はあったのですが、最初は、69歳という年齢で参加できるのかと不安でした。ただ、少しでもお役に立つことができればと思ったんです。そこで、勇気をふり絞っていわて生協さんに電話したら、「何歳でも結構です。是非ご参加ください」と言われて勇気付けられました。被災から1年がたっても、震災の傷跡はそのままです。まだまだボランティアを続けなければと思いました。少しでも参加する機会が増え、復旧・復興に役立てたらと思っています。

お待たせしました！真崎わかめが復活しました！

いわて生協が、1975 年から販売してきた産直の「真崎わかめ」。その産地である田老町漁協（岩手県宮古市）は、東日本大震災で甚大な被害を受けました。そうした中、復興に向けて取り組みが進められ、この 3 月下旬からついに販売が開始されました。

●漁業施設のほとんどが失われた田老地区

大津波で甚大な被害を受けた宮古市田老地区。田老町漁協でも、わかめ加工場の工場長や従業員数人が亡くなり、組合関係者全体では 80 人を超える犠牲者がでました。963 隻あった漁船のうち残ったのはわずか 80 隻足らず。また、7 カ所あった漁港の堤防や岸壁が破壊されたことで、わかめの養殖施設や加工工場をはじめ、魚市場や製氷工場、コンブ、アワビの養殖施設など、多くの漁業生産施設を失いました。

真崎わかめ

●復興に向けての取り組み

漁業生産施設の復旧とともに、大きな問題となったのは人材の確保でした。田老町漁協組合長の小林昭榮さんを筆頭に、漁協職員による懸命の説得で、わかめの生産者 94 人のうち、72 人が生産を再開。また、新たに生産に加わる若い仲間も 6 人増えました。

こうして立ち上がった生産者の「決してあきらめない」という強い気持ちが、養殖施設や加工施設を驚異的な早さで復興させ、2012 年 3 月 16 日、わかめの収穫初日を迎えることになりました。初日に水揚げできた養殖わかめは 4 トン。徐々に増え、22 日には 45 トンになりました。例年は 1 日に 80 トン、ピーク時には 120 トンあり、それに比べると少ないですが、4 月末日の収穫終了までに合計 1,300 トンを目標に取り組んでいます。これから本格的な復興が始まります。地元経済を動かす原動力の漁業が動き始めました。

●真崎わかめ「収穫を祝う会」を開催！

3 月 24 日、いわて生協は、「田老町漁協　収穫を祝う会」を開催し、漁協関係者 26 人といわて生協組合員・常勤者 65 人が参加しました。組合員は、わかめのボイル加工場・パック工場を見学した後、田老町漁協本所にて、盛りだくさんの料理を堪能したり、「真崎わかめの歌」の合唱などで懇親を深めました。またこの会では、真崎わかめの試食やレシピの説明もあり、参加者はあらためて、わかめが味わえることの喜びを噛みしめていました。

いわて生協理事長　飯塚明彦さん

待ちに待った真崎わかめの収穫と製品の出荷が始まりました。本当にうれしいです。いわて生協では、宅配での注文が、受付開始 1 週間で 2010 年の売上高の半分を超えるなど、組合員がいかに真崎わかめを心待ちにしていたかがうかがえます。このわかめの出荷は、復興に向けての大きな第一歩。そこに至るには田老町漁協の皆さまの大変なご苦労があったと思います。心から敬意を表します。

選別作業を体験。

田老町漁協組合長　小林昭榮さん

本当に漁業を再開できるのだろうかと思ったこともあります。しかし、皆さんに支えられてやってまいりました。いわて生協さんとの 36 年のお付き合いが田老町漁協の組合員の誇りです。皆さんの真心が希望となり、前へ進む力になっています。田老地区は過去にも津波や火災などによる被害に遭いましたが、そのたびに立ち上がってきました。今回も必ず復興を成し遂げたいと思います。

田老町漁協　収穫を祝う会。

宮城を「食」で守る！「食のみやぎ復興ネットワーク」

みやぎ生協は、「食のみやぎ復興ネットワーク」の活動に力を入れています。これは、東日本大震災によって甚大な被害を受けた県内の農業・漁業関係者や食品関連産業者が、地域復興を目指すことを目的とし、2011 年 7 月 2 日に結成されました。2012 年 4 月 18 日現在の参加は 183 団体です。

●プロジェクトを立ち上げ、具体的な活動を実施

「食のみやぎ復興ネットワーク」では、「農地を守る」「地域の特産品を守る」「生産者、地場メーカー支援」「伝統的な食生活の見直し」など、さまざまな観点からプロジェクトが立ち上がり、新しい商品の開発などが行なわれています。4 月 18 日現在、24 のプロジェクトがあり、みやぎ生協では、プロジェクトで作られた商品を店舗で供給したり、その運営などで中心的な役割を担っています。

仙台白菜プロジェクトでは高校生も参加。

（プロジェクト例）

・「なたねプロジェクト」～農地の耕作放棄地化の防止。地域の生産者支援。

・「秘伝豆プロジェクト」～秘伝豆の作付け拡大で休耕圃場の復活。

・「りんごワイン復活プロジェクト」～ 被災した県内唯一のワイナリー「桔梗長兵衛商店」が再建される日まで、山形のワイナリーにて“りんごワイン紅玉”を製造。

・「地場菓子応援プロジェクト」～宮城県産の原料を使った菓子を開発することで、県内の生産者、東北の加工業者の復旧・復興を応援。

●プロジェクトにより、新しい商品が次々と登場！

◇ノルウェー産さば吟醸味噌漬け（半身 2 枚入り・398 円）

ネットワークに参加する永田醸造株式会社、株式会社仙台水産、そして、みやぎ生協で立ち上げた「地元で作った漬魚プロジェクト」が開発した商品です。3 月 22 日からみやぎ生協全店で取り扱いを開始し、4 日間で 3,500 パックの利用がありました。

◇そのまんま煎り豆（80g・218 円）

「県産大豆を使用した菓子づくりプロジェクト」開発商品です。県産大豆を 100％使用しました。製造はネットワークに参加する社会福祉法人はらから福祉会です。4 月 12 日より、いわて生協、生協共立社、みやぎ生協、コープふくしま全店で発売中です。

●支援を全国に呼び掛けています

「食のみやぎ復興ネットワーク」の取り組みの一環として、みやぎ生協では、被害が大きかった「宮城県漁協志津川支所」「JA いしのまき」の生産者が復興へ向けたスピードを上げることができるように、生産手段（機械・資材）を贈る募金活動を全国の生協へ呼び掛けています。

宮城県漁協志津川支所は、地震による津波で船や養殖施設はもちろん、陸上の処理施設のすべても失い、震災前には 1,000 隻あった漁船の 9 割が消失しました。復興には漁船や機械・機材が必要です。その為に必要な費用の約 1/3 は自己負担です。

津波による被害で、土の表面が白くなったキュウリ農家の畑。

JA いしのまきは、依然として地下水が塩分を含んでいるために、キュウリやイチゴの栽培ができない状況が続いています。

こうした状況から抜け出すために、全国からの支援が求められています。（具体的な支援募集内容については、8 面参照）

「食のみやぎ復興ネットワーク」は地域の協同を軸としながら、「食のみやぎ」を守り、育てる活動を末永く続けていきます。

福島の子どもたち、神奈川県の自然を満喫

3月30日から4月2日にかけ、神奈川で「福島の子ども保養プロジェクト」が行なわれました。

イチゴ狩りを楽しむ子どもたち。

ボランティアが心をこめて調理を堪能。

この取り組みは「守りたい・子ども未来プロジェクト」※が主催、神奈川県ユニセフ協会、福島県生協連、福島県ユニセフ協会が共催し、行なわれたものです。協力団体として、神奈川県生協連、コープかながわなどが名を連ねています。

神奈川県生協連は、主に県内関係団体への声掛けを行ない、手を挙げてくれた関係団体と神奈川県ユニセフ協会と話し合いながらプログラムの詳細を詰め、当日に備えました。神奈川県生協連専務理事の丸山善弘さんは、

「日頃から協力していただいている団体や施設にお声掛けをしましたら、皆さんすぐに応えてくださいました。たくさんの団体にご協力いただき、この感謝の気持ちは、言葉では表現できません」と話していました。

今回参加した子どもは、福島市、郡山市、本宮市、いわき市からの計32人。また、郡山市と二本松市に住む短大生のボランティア2人と福島市の臨床心理士の成井香苗さん（福島県ユニセフ協会）が同行しサポートしました。

子どもたちは、イチゴ狩りやピザ作り、外遊び、バーベキューと、思いっきり体を動かし、のびのびと遊んでいました。

※神奈川県への避難者の支援を目的に設立された団体。

●地域の多くの団体が、保養プロジェクトに協力してくださいました

後援：秦野市

協力：秦野市子ども健康部子ども育成課・福祉部被災者支援課・農産課、秦野市水道局、表丹沢野外活動センター、秦野市観光協会、神奈川県生協連、秦野市農業協同組合、コープかながわ、医療生協かながわ、パルシステム神奈川ゆめコープ、ＮＰＯ法人エコフォーラム22、秦野商工会議所・志津加、折り紙サークル、表丹沢菩提里山づくりの会、宝道、株式会社ヨネヤマ、伊藤ハム株式会社、株式会社不二家秦野工場、全農物流株式会社神奈川支店、石田ファーム工房とかわラボ、有限会社湘南車検センター、みのげマス釣りセンター

＜参加者の声からみる、福島のいま＞

・参加者の保護者（福島市）

学校の除染は進んでいるので、授業は外でできます。公園の除染も進んでいますが、その周囲は除染されていないこともあります。そう考えると、ちょっとためらってしまいます。こういった機会に、思いっきり遊ばせたいと思います。

・参加した11歳女子生徒（福島市）

私の学校は400人くらい生徒がいたけど、300人くらいに減りました。私も震災直後、京都に避難したけど、友達と離れるのが寂しくて、大泣きしてしまいました。友達は、マスクしている人もいるけど、してない人もいて、人それぞれです。

このプロジェクトに4人の友達と参加しました。参加できて、うれしいです。

・福島県生協連専務理事　佐藤　一夫さん

全国の生協やユニセフ協会などから「福島の子ども保養プロジェクト」への支援が広がっています。このプロジェクトは、未就学児を対象に週末保養を中心に行なっていますが、長期休暇の際は、就学児を対象とした子どもだけの企画も行なっています。こうしたプランも親子にとってストレス解消のよい機会です。親から、あるいは子どもから、互いが解放される時間も必要なんですね。このプロジェクトが、家に閉じこもらざるを得ない親子に、外に出てもらう習慣づくりのきっかけとなればと思っています。

みやぎ生協「せいきょう便」・「イベント車」2台目導入

明るい絵がペイントされたイベント車の2号車。

みやぎ生協にて、イベント車の贈呈式が行なわれました。

みやぎ生協では、3月26日に「せいきょう便」の2台目を、3月27日に「イベント車」の2台目を導入しました。

「せいきょう便」は、近隣に小売店がない仮設住宅への入居などで、買い物に困っている方々への商品供給が目的の移動販売車です。生鮮食品、加工食品、生活関連商品など約600アイテムが揃っています。1号車は石巻市および東松島町を、2号車は気仙沼市および南三陸町の仮設住宅地域を中心に巡回しています。

「イベント車」は、CO·OP商品などの試食品を積み込み、簡単な調理設備も備えたトラックで、仮設住宅などを巡回し、生協のご案内を行なうために導入されました。車体には、復興を願い、明るい絵がペイントされました。これは、日本生協連復興支援ポータルサイトのトップ画像を参考に作成されたそうです。1台目のイベントカーは、主に県内の北部地域を中心に回り、半年で約1万人の方とお話し、約3,600人の方が生協に加入されました。試食ができるイベントカーは、被災された方のコミュニケーションの場にもなっており、南部地域を回る2台目も活躍が期待されています。

福井県民生協
「被災地に花を咲かせよう」

球根のラベルには、「花と笑顔が溢れるようになる日まで、私たちは皆さんを支援し続けます。組合員一同」と書かれています。

福井県民生協は、3月に店舗と宅配で「被災地に花を咲かせよう」プロジェクトを実施しました。プロジェクトに賛同する組合員が1口1,000円で申し込むと、グラジオラスの球根が組合員本人に1袋（5個）届き、同時に岩手県内の被災地に1袋（5個）贈られるというものです。約3万個の注文があり、そのうちの2万5,000個は、いわて生協を通じて、被災地支援を行なっている団体や、被災地の福祉施設・保育施設へ贈られました。また、いわて生協においても、ふれあいサロンなどで活用されています。

コープあいち
総代会記念品として「つかむにゃん」550個注文

つかむにゃん。いろいろなものをはさむことができます。

コープあいちでは以前から支援活動を行なっている関係で、岩手県「大船渡中学校仮設住宅」に入居している有志で製作している「つかむにゃん」を総代会記念品として550個注文しました。これは、ねこの形をしたぬいぐるみの中にクリップが入っていて、物をはさむことができる商品です。このグループの代表であり、いわて生協けせんコープ・コープリーダーの広野稲子さんは、「仮設住宅に入居し、みんなで集まるうちに『いただいた支援物資を一つも無駄にしたくないね』という話になりました。アイデアを出し合い、いろいろなものを作りました。これが誰かの役に立ったり、誰かに可愛がってもらえたらうれしく思います」と話していました。

このページでは、日本生協連出版部発行の『CO･OP navi』「東日本大震災・復興レポート」と、
日本生協連 HP「復興支援ポータルサイト」から一部記事を抜粋し、紹介いたします。

CO･OP navi

コープさっぽろ　生活支援ボランティア

ボランティアから自主的な活動も始まりました。バザーもその一つです。

バザー会場では、北海道大学学生によるチャリティーコンサートも開催。

北海道札幌市には、東日本大震災により避難してこられた方が多く生活されています。そうした中、避難された方の役に立ちたいという声が組合員の中から上がり、「コープ生活支援ボランティア“きずな”」が立ち上がりました。

“きずな”の役割は、避難されている方と支援するボランティアをつなぐことです。ボランティアは、“きずな”が提示するボランティア活動メニューの中から支援に協力できそうなものを選び、登録します。“きずな”は、それを基に支援要請と合うボランティアを探し、派遣します。支援メニューは多岐に渡り、子ども教室や荷物整理、引っ越し補助や物資移動運搬、地域案内や高齢者への対応、車の運転などが挙げられます。こうした活動は大変喜ばれ、最近では、“きずな”の支援を受けた方から「相談にのってほしい」と、直接お電話をいただくこともあるそうです。

コープさっぽろでは、“きずな”の活動のほかにも、組合員からの募金を活用し、避難している高校生全員に支援金を支給したり、道内の被災者支援団体に助成金を送ったりしています。組織本部基金事務局長の稲垣一雄さんは、

「被災された人、支援する人、地域の団体の方々と『考え合う』関係性を築きながら、長期的な支援を行なっていきたいと思います」と話していました。

復興支援ポータルサイト

おかやまコープ「絆コンサート」開催

3月19日、おかやまコープでは、特定非営利活動法人AMDA（アムダ）と共催し、「東日本大震災　絆コンサート」を開きました。

このコンサートは、AMDAが岩手県大槌町の県立大槌高校の吹奏楽部を招いて開催したものです。地元岡山の就実中学・高校吹奏楽部も友情出演しました。会場に詰め掛けた350人の聴衆は、高校生が奏でる“音の絆”に魅了され、被災地へと思いをはせていました。

就実中学・高校吹奏楽部より大槌高校へ横断幕のプレゼント。

復興支援ポータルサイト

フクシマフーズ（株）「いつも応援をありがとうございます」

フクシマフーズ（株）は、「CO・OP 炊きたての味 おいしいご飯」を製造しています。震災直後は、電気・ガス・水道などのライフラインがストップし、工場設備の一部が被災しました。現在は設備もすべて復旧し、通常の製造体制に戻っています。従業員は、

「全国の組合員さんから応援をいただき大変感謝しています。買い物に行った生協のお店で当社を応援するポスターを見たときはとても励みになりました。工場は、全国の生協さんからご注文いただいたおかげでフル生産となっています。これからも安心・安全でおいしい商品を、心を込めて製造してまいります」と話していました。

これからも、おいしいご飯をお届けします。

復興関連情報　予定一覧

【岩手県】

いわて生協 ・・・・・・・・ ●盛岡から陸前高田へのバスボランティア（4/28　※締め切り 4/26）
●「南昌荘で楽しむ端午の節句」（4/25 ～ 5/6　※ 4/30、5/1 休館）…東日本大震災で被災された方は入園無料。
●釜石コープ「生協青空市」(4/27　11 ～ 13 時、釜石支部）…CO・OP 商品販売、地場野菜、手作り団子、漬物、山菜などの販売
●田老町漁協女性部主催の植樹活動への協力（4/29）…宮古コープの組合員が参加、いわて生協から鍬（20 万円）を支援
●宅配「復興応援商品特集」…5 月 1 週（12 アイテム）、8 月 4 週、11 月 4 週
●マリンコープ DORA に「復興商店」常設（5 月ゴールデンウィーク明けからスタート予定）…被災メーカー商品、仮設住宅のグループの手作り品などを販売、体験コーナー設置（あわび貝磨きや、英字新聞バッグ作りなど）

【宮城県】

みやぎ生協 ・・・・・・・・ ●こ～ぷの森神行堂山植林体験（5/13、「食のみやぎ復興ネットワーク」、植林活動を通じて震災から立ち上がる志津川のカキ生産者応援）

【福島県】

福島県生協連 ・・・・・・・・ ●「福島の子ども保養プロジェクト」（毎週末開催）

【兵庫県】

コープこうべ ・・・・・・・・ ●みやぎ生協仙南ボランティアセンターを迎えてのパネルディスカッション（チャリティーバザー、支援物資販売コーナーも設置、5/19、協同学苑）

支援募集情報

○いわて生協：
・被災地ツアー（観光を含んでも可能）、被災地ボランティアツアーの企画・実施
・ふれあいサロンなどで使用する、お菓子（各地の名産品など）の提供
・被災地のお母さんたちや福祉作業所などの復興応援商品の販売協力（宅配以外でのイベント等での取り扱い協力など）
・被災メーカーの商品や復興応援ギフトなどの店舗・宅配での販売協力
連絡先は、いわて生協組織　本部　小野寺 真さん（019-603-8299　月～土　9:00-18:00）まで。

○復興プロジェクトかけあしの会：被災された方の手作りで製作し、収入源となっている「あわびの貝アクセサリー」。この原料となる、あわびの貝が不足し、作業提供が難しくなっているため、あわびの貝を募集します。送り先：〒 027-0038 岩手県宮古市小山田 2-2-1　マリンコープ DORA 店長 菅原 則夫さん（送料は、発送者ご負担でお願いいたします）

○みやぎ生協：ふれあい喫茶で使用する、お菓子（各地の名産品など）を募集しています。連絡先は、みやぎ生協ボランティアセンター（022-218-5331）まで。

○食のみやぎ復興ネットワーク：「宮城県漁協志津川支所」に漁船・船外機・フォークリフト・わかめ収穫用コンテナを、「JA いしのまき」に 海水淡水化装置を贈るため、上記物品、あるいは、支援金を募集。連絡先は、みやぎ生協 藤田 孝さん（022-772-6141）まで。

○福島県生協連：「福島の子ども保養プロジェクト」の①スタッフ、② 大型連休の保養受け入れ先募集。①は、1 カ月単位で毎週末参加可能な方を。②のご提案は、企画（日程、募集対象者、募集人数、スケジュール、参加者負担額等）を明確にした上で、ご連絡ください。連絡先は、福島県生協連 根本 喜代江さん（024-522-5334）まで。
（保養の企画、運営、費用は、主催者にご負担いただきます。ご了承ください）

○その他：首相官邸 HP にて「被災地の今」を伝える「私の復興便り」コーナー（http://www.kantei.go.jp/fukkou/tayori/）が開設され、震災を忘れないための取り組みとして、被災地や復興支援活動の様子を写真で紹介しています。読者の皆さまが撮った復興支援活動の様子などを、是非、投稿し、全国で共有してください。

◎生協の震災復興支援の取り組み情報募集 !!
皆さまの地域での生協の復興支援に関する取り組み情報をお寄せください。情報提供用専用メールアドレス action@coop-book.jp

つながろう CO·OPアクション情報（次回 5 月 30 日発行予定）
発行 日本生活協同組合連合会(会員支援本部出版部)
〒 150-8913 東京都渋谷区渋谷3 ― 29 ― 8 コーププラザ11F Tel:03-5778-8183/ Fax:03-5778-8051 action@coop-book.jp

2012 国際協同組合年